



きたかる

2016年
秋は一瞬、冬が来た号

Since 2010
VOL.6

仕事も愉しみも、
季節のリズムで。

王領地の森の近くに4年前にオープンしたベーカリーカフェ「六花」。焼きたてのパンやランチを楽しみに、夏場は別荘客で賑わいます。お店の営業は、春先から11月下旬まで。なぜなら、店主の長谷部武さんには、冬、もうひとつ別の「顔」があるからです。20代の頃から、東京でカメラマンの仕事をしてながら、冬場は長野や婦恋を拠点にアルペンスキーに熱中。テレマークスキーに転向してからは、協会公認指導員としてレッスンやクロスカントリースキーのツアーを行っています。一時は通年の仕事に就いたこともありましたが、「自分からスキーを取ったら抜け殻のようになってしまっ……(苦笑)」。そこでふたりが夏場の生活の軸にと選んだのが、和美さんが焼く手ごね式のパンをベースにしたカフェでした。「厳しい先生の元で習っていたのですが、自分でお店を持つとは思っていませんでした。開店当初も今も、毎日ドキドキしながら作っています」。スキーヤーの武さんは当然ですが、和美さんも「北軽は冬がいちばんいい」と声を揃えます。変化の激しい季節のリズムに添うように、自分たちの仕事や愉しみを組み込んでいく。ふたりが見つけた自然体の暮らしのなかに、北軽らしいライフスタイルのひとつのヒントがありそうです。

表紙の人・長谷部武、和美さん



PROFILE : KAZUMI & TAKESHI HASEBE

東京と冬山を行ったり来たり的生活をしていた武さんと、幼稚園の事務の仕事をして山歩きやパンづくりなど興味のあることに打ち込んできた和美さん。ふたりが出会ったのもスキーがきっかけ！一見おっとりとして見える和美さんですが「いざやるとなったら行動力や底力があるのは彼女のほうなんです！」と武さん。ふたりの飾らない人柄も「六花」の人気の秘訣です。

「共同体」としての別荘地。

「避暑地・北軽井沢」の始まりは、小川のほとりに寄り添うように建てられた十数軒のバンガローでした。

大正12年、東京帝大を卒業した官僚や医師らによる会員制組織「一匡社」のメンバーが、まだ人家もまばらなこの土地に、家族のための健康保持と静養のための別荘地を作りました。それが今に続く「一匡いっけいむら邑」です。

土地は共同所有とし、各戸に境界は設けない。食材は共同購入や自給自足。敷地内には共同浴場や運動場などをつくり、住民たちは自由にお互いの住まいを歩き来し、全体がひとつの家族として暮らす。そのスタイルは、武者小路実篤の「新しき村」に代表される、大正デモクラシーの流れのなかで生まれた「自他共生」の生活共同体を強く意識し、その理想を実践するものでした。一匡邑には今も、開村当時に建てられた西村伊作の設計によるバンガローが数棟、代々の所有者の手で守られながら現存しています（※）。

自然と調和する簡素なバンガローを建て、生活改善を望む人たちが集まり、小さくとも仲睦まじく美しい理想郷をつくる。「共同体」の思想は、一匡邑の2年後に開かれた「法政大学村」とも相通じる、北軽山荘文化の根幹となる考え方でした。

別荘地として開かれておよそ100年。経済が成長し、「個」が優先される時代の変遷とともに、「共同体」としての別荘地のかたちは、ほぼ消滅しつつあります。しかし、時代が再び「個」から「シェア」へと転換しようとしている今、かつて全国にさががけて「共同体」が深く根づいた「北軽山荘コミュニティ」という存在に、あらためて注目が集まる日も近いのかもしれない。

（※）「一匡邑と西村伊作の関係については、『きたかる建物応援団』がゆ〜」ページをご覧ください。

「草原」の持つ可能性。

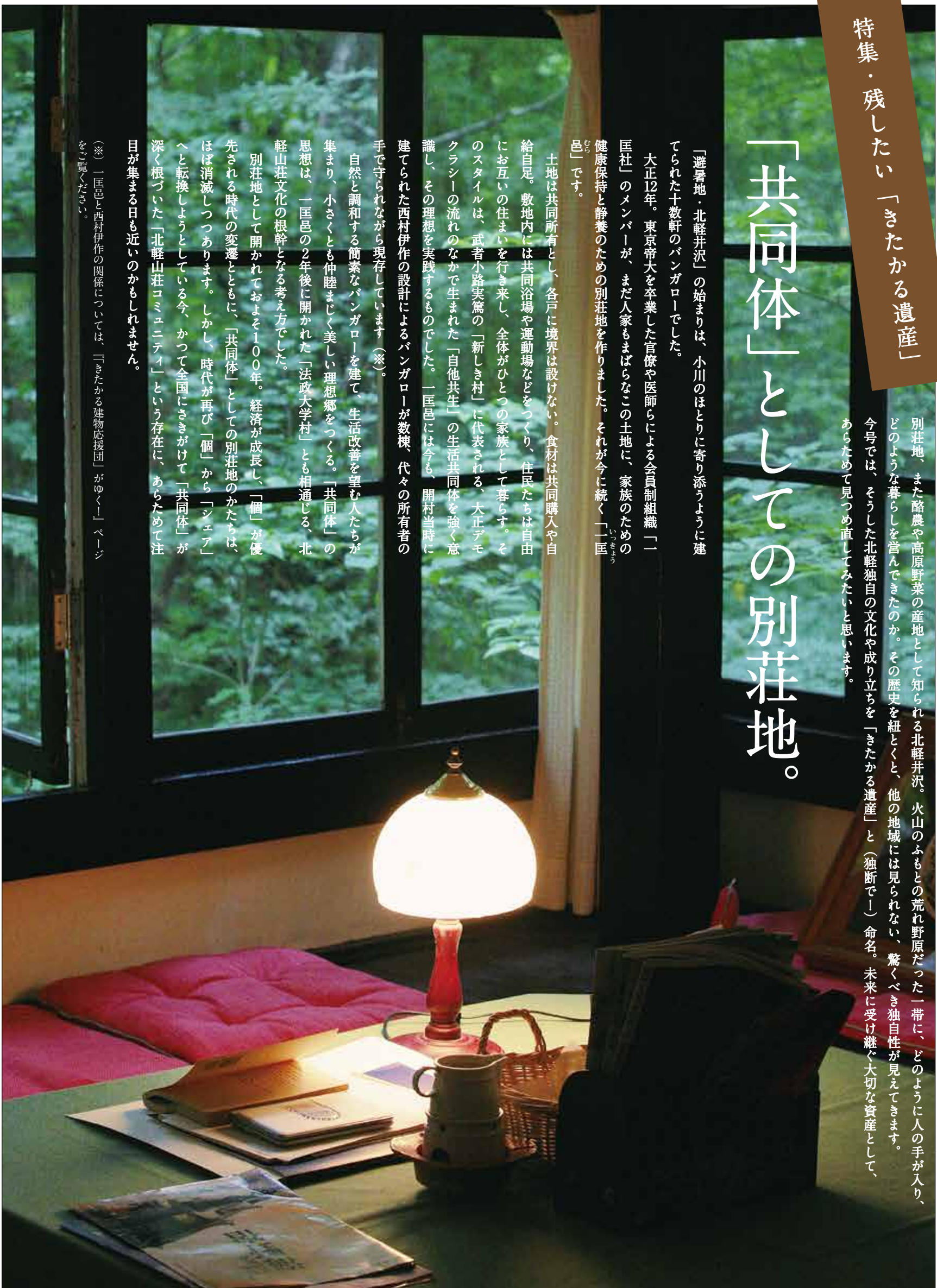
「六里ヶ原」と呼ばれる浅間北麓一帯は、昔から、たび重なる噴火の影響で、森林が育たず、痩せた大地の上に草地が広がるばかりの広大な原野でした。

この場所が初めて歴史の表舞台に登場するのは、鎌倉幕府が開かれた直後のこと。源頼朝みずから、この場所で「浅間野狩」を行なったという記述が文献や民話に残されています。「狩宿」「御所平」「大屋原」「鷹襲」「浅敷山」などの地名も、これに由来していると言われます。将軍がわざわざ鎌倉からやってくるほどですから、当時から多くの野生動物が棲み、狩り場に適した見晴らしのよい草原が広がっていたことが想像できます。

同時にこのあたり一帯は、望月氏や海野氏といった近隣の領主たちの馬を育てる広大な牧場まきばでもありました。馬と浅間高原は、その後も切っても切れない密接な関係結びます。戦国時代から江戸期にかけては、軍馬の育成だけでなく、地元の農民たちの馬の放牧地や干草刈り場として、草原はなくてはならない場所でした。

この原野に初めて、大規模な開発の手が入ったのが、明治16年。北白川宮能久親王による「浅間牧場」の開設です。当初、綿羊牧場として国が選んだこの場所を、北白川宮が「いや、軍馬の育成のための牧場にしよう」とみずから経営に乗り出しました。この最初の浅間牧場の敷地は、東西20キロ、南北18キロにも及び、現在の北軽井沢や応桑地域がすっぽり入ってしまうほどの大きさでした。一時は日本有数の馬の牧場として、多くの名馬を飼育・産出しましたが、やがて民間に払い下げとなり、土地の一部は群馬県に移管、そこに昭和27年に誕生したのが現在の「浅間牧場」（浅間家畜育成牧場）です。

火山灰が堆積し、耕作には向かない六里ヶ原の大地は、長い間「不毛の地」と呼ばれてきました。けれども見方を変えれば、多様な動植物や、牧畜という人々の営みを支えてきたこれだけの大草原が今なお残る場所は、国内でも稀少です。『草原』には、まだまだ多くの可能性が秘められているのです。



「薪・炭」が支えた山間の暮らし。

農作業がひと段落した12月初旬。炭焼き小屋の煙突から、細々と白い煙がたなびき始めます。かつては浅間北麓のあちらこちらで見られたこの光景も、今ではごく珍しいものになってしまいました。

日本で炭が焼かれ、使われ始めたのは、古墳時代のことと言われています。近世、江戸をはじめ都市部が発展するにつれ炭の需要は高まり、農業生産の低い山間部の住民にとっては、炭焼きなどの山稼ぎは貴重な現金収入源でした。浅間山麓でも、江戸時代の村の様子を記した資料からは、炭焼きがさかんに行なわれていたことが見て取れます。明治45年に書かれた草軽鉄道「創立の趣旨」のなかにも、旅客のほか「長野原・嬬恋・吾妻牧場周辺より積出す木材・薪炭・その他貨物輸送のため」とあります。ある時期、南木山のふもとの栗平周辺には、多くの炭焼き小屋が並び、炭焼きに携わる人たちで賑わっていたといえます。昭和初期をピークに、石油が普及し始める40年代まで、製炭業はこの地域の主要な産業でした。今でも小さい頃、家庭の煮炊きや暖房に炭を使い、山からの切り出しや炭焼きの手伝いをさせられたという思い出のある住民の方も多いことでしょう。

高度成長期、炭や薪は、私たちの生活から急速に姿を消してしまいました。古代から数千年続いた知恵と技術が、わずか数十年の間に忘れ去られようとしています。今も鎌原で炭焼きを続けるある人はこう言います。「山にあるものに手を加えてエネルギーにする。炭づくりは生きることの基本。時代が便利に楽になればなるほど、いつかまた必ず、炭や薪など身の回りの山にあるものに頼らなければいけないときが来る。そのときに誰も技術を覚えていないんじゃないじゃあ困るからね。」

70年目の「開拓地」、その明日。

青々と繁るレタスやキャベツ、たわわに実るトウモロコシ。夏の北軽井沢を象徴する広大で美しい農園地帯が、つい70年前までは熊世の生い茂る荒地であったとは、今となつてはなかなか想像ができません。

終戦後、浅間北麓一帯では、満州からの引揚者を中心に大規模な開拓が行われました。北軽井沢のおもな開拓地は、大屋原・ハイロン・甘楽・群高の4地区。長野原町内では他にアテロ・下小菅など、嬬恋村には浅間・山梨・中原開拓などの地区があります。このうち大屋原に入植したのが、勢多郡木瀬村（現前橋市）から満州に渡った人々。敗戦と同時に命からがら日本に戻り、第二の故郷として選んだのが、標高千メートル以上の寒冷地、火山灰土と落葉松林が広がる荒野でした。開拓者は協同で開墾を進め、昭和23年には「北軽井沢開拓農協」を結成。冷害の影響を受けた経験から、まず草をつくり、その草で牛を育て、堆肥で土づくりをするという、今の農業形態の土台ともいえる独自の原則を定めます。この方針により、北軽井沢の大地は、高冷

地という不利な条件のもとでも、肥沃な農地として大きく生まれ変わることができたのです。

開拓地ではその後、2代目を継いだ人々が農地や品種の拡大・改善を進め、さらにここ10年の間には、一度は外に出て様々な経験を積んだ子ども世代が戻り、これからの農業の在り方を模索し続けています。大屋原で化学肥料・化学農業に依存しない栽培に取り組むグループのメンバーでもある3代目のひとりにはこう話してくれました。「僕たちが戻ったときには土地があり、機械があり、ある程度の栽培技術もお金もあった。開拓当時のことは僕らでも知らないことも多く、正直今は過去のことよりも今日明日をクリアしていくことで必死なんだけども。でもひとつ言えるのは、大屋原の未来は明るいんじゃないかな」。時代が変わり技術は進歩しても、厳しい自然環境に翻弄される農業の基本は変わりません。そのなかでも逞しく明日を切り開いていく姿には、先人たちの「開拓者魂」がたしかに受け継がれているように感じます。

11月5日(土)
「きたかる」主催
森でファッションショー開催

火 1
水 2
木 3 文化の日 本格的な冬がやってくる頃、ここが北軽井沢のおしゃれ好きの腕の見せ所! あったかくてかわいい or カッコいいスタイルを、一緒に探しませんか。
金 4
土 5 問合せ: ルオムの森 Tel.0279-84-1733



11月上~中旬
カラマツの黄葉

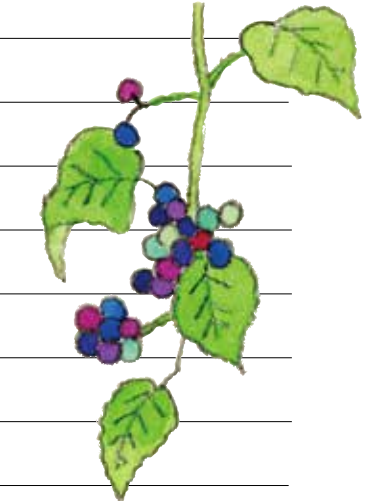
火 8
水 9
木 10
金 11
土 12

上を見ても下を見ても黄金色な秋の風物詩。カラマツ落葉後は森の先の山々まで見渡せる。



11月
秋冬限定「野原の宝石」

火 15
水 16
木 17
金 18
土 19

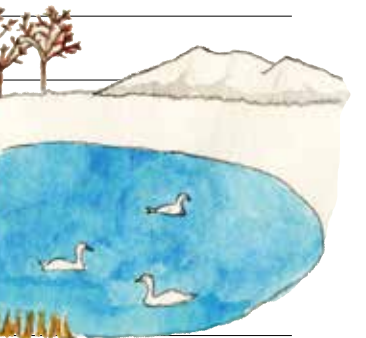


11月15日~2月15日
長野原町狩猟解禁時期

火 22
水 23 勤労感謝の日

11月下旬
白鳥飛来

火 29
水 30



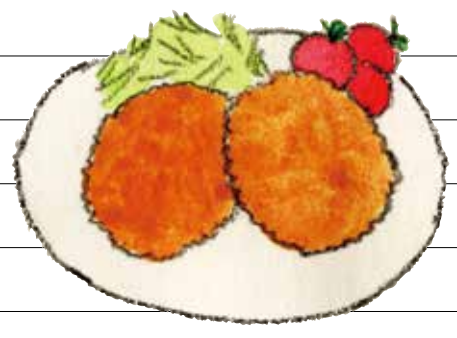
11月末
浅間山に冠雪

山に3回雪が降ると麓も雪が降ると言われていて、車のタイヤを履き替えるのもこの頃。浅間山は雪化粧をまどって、真っ白な寝姿観音になります。



12月上旬
新花豆の出荷

土 3
日 4
月 5
火 6
水 7
木 8
金 9
土 10
日 11

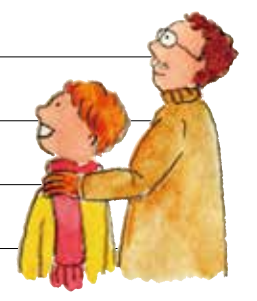
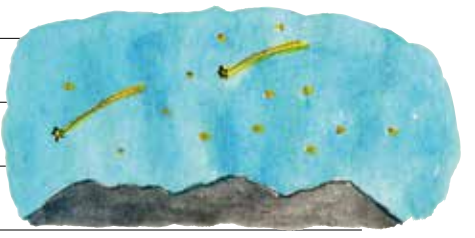


12月
冬越しの
超逸品ジャガイモ

少し前までは一戸に1つ「室(ムロ)」があり、そこでひと冬寝かせて保存食としました。寒い場所で保管すると驚くほど甘さが増します。嬬恋では、ジャガイモを使った保存食「くろこ」も有名。

12月中旬
天然プラネタリウム

木 15
金 16
土 17
日 18
月 19
火 20
水 21
木 22
金 23 天皇誕生日



12月中旬
年越しの箸

材料採取から自ら行う究極のMY箸。山からヌルデを切ってきて、1本1本削って作ります。その際、箸の真ん中部分を太く、両の先端を細くして「はらみ箸」にすると縁起がいいといわれています。

薪ストーブ
美味しいもの10選

寒冷地の心強き相棒「薪ストーブ」。家一軒を暖める能力だけでなく、便利で手軽な熱源としても手堅い。冬場はいつだって火が入っているから、小腹が空いたらすぐ薪ストーブで何か作る。そしてそれは、魔法でもかけられたかのようにうまい。例えば...●天板で焼いた干しイモの甘く焦げたところ●ごま油を塗って焼いたシイタケに醤油と七味をちょっと付けたやつ●ブリッと歯ごたえのあるソーセージ●ケンさんの豆餅●中がアツアツの焼きブチトマト●ペラペラの紙みたいな薄切りドライ苺●おでんを作るような大鍋で作ったお汁粉(とくに2日目)●つぶ貝の缶詰(味付)●焼きリンゴ(バター多め)●カントリーマアム(あえてもう一度焼く)。この贅沢を味わいたいために、冬の長い地域に住んでいる。さて今日は何をつくろうか。



「きたかる」

生活絵本カレンダー
2016~17

長く厳しい北軽井沢の冬。洗濯機が凍ったり、パソコンが凍ったり、車がスタックしたり、毎日がサバイバルな冬。息をのむような夕焼けや、皮膚が裂けそうに冷えた朝のダイヤモンドダストといった信じられない美しさに遭遇する冬。一年で最も「生きてることを実感」する季節です。

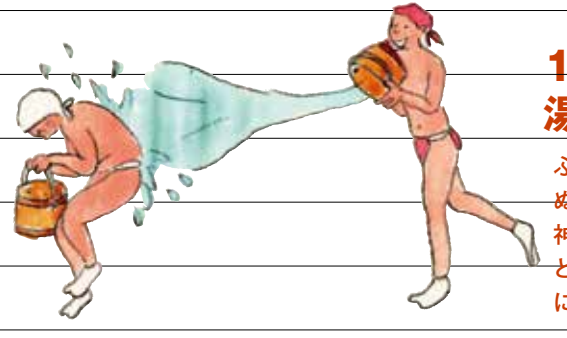
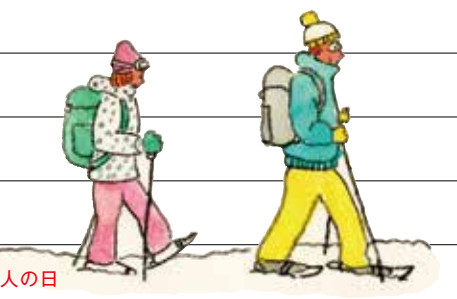
1月1日(元日)
初詣

日 1 元日
月 2
火 3
水 4
木 5
金 6
土 7
日 8
月 9 成人の日



1月上旬~3月中旬
「キタカル
スノーシューフィールド」

火 10 1周約1キロの浅間山が見える絶景コース。期間中毎日開催:9時~14時(積雪状況により変更有)。有料。問合せ先:プレジデントリゾート軽井沢 0279-84-1441
水 11
木 12
金 13
土 14
日 15
月 16
火 17
水 18
木 19
金 20
土 21
日 22
月 23
火 24
水 25
木 26
金 27
土 28
日 29
月 30
火 31



1月20日(金)
湯かけ祭り(川原湯)

ふんどし姿の男たちが夜も明けきらぬうちから湯の掛け合いをし、湯の神様に感謝します。その湯に当たると「福が来る」とも言われ、見物客にも容赦なく浴びせかけます!

1月下旬
一年で最も冷え込む頃

火 24
水 25
木 26
金 27
土 28
日 29
月 30
火 31

1月下旬
バラギ湖の
ワカサギ釣り解禁





「戦いくさが終わったそうよ」と伝えたら
伯母はすぐにこう言いましたね。

「ああ、大きな博打が済んだ！これからがわたしたちの時代だ！」って。

（松尾伊都子さん・88歳）

松尾さんが初めて北軽を訪れたのは、終戦間近の18歳の頃。九州から上京し、女子大に通っていましたが、空襲も激しくなり、北軽に住む伯母のもとに身を寄せることに。その伯母とは、法政大学村に開村以来暮らし作家・野上弥生子です。

野上弥生子と松尾さんが生まれ育ったのは、大分県臼杵にある創業150年を超える老舗の醤油屋さん。作家や学者の奥さんである以前に、この「商家の娘」としての血が、野上弥生子の原点にあった、と松尾さんは言います。「人にも自分にも厳しく、面倒見がよい。戦争中も、どうしたらみんなが餓死をしないで済むか、子どもたちを守るか、ということをまず先に考えていました。」

その面倒見の良さや実行力は、松尾さん自身にも受け継がれています。昭和50年代初めから現在に至るまで続く「石田観光農園」を拠点とした早稲田大学グリーククラブの夏合宿、合宿を行なうだけでなく、定期的にコンサートを開くなど地元・北軽との交流も深いこの活動の発端となり、常に支え続けてきたのが松尾さんです。

数年前に大きな手術を経てもなお、エネルギーで湧刺と、お喋りも大好きな松尾さん。いくつものエピソードを聞かせて頂いたなかから、ほんの一部をここにご紹介しましょう。

布川さんが「戦いくさが終わったよ」と言ったの。そう言われてもわたしにはよくわからなかったのだけど、家に帰って伯母にそう伝えたら、伯母はすぐにこう言いましたね。「ああ、大きな博打が済んだ！これからがわたしたちの時代だ！」って。伯母は、伯父（野上豊一郎）と一緒に、ヨーロッパやアメリカを見て回っていたでしょう。特にアメリカは、あんな大きな機械を作る国と戦争したらとん



わたしは、終戦の日の前、8月12日だったか13日だったかに、戦争が終わったというところをいち早く知ったんです。それはどうしてかというとね、当時、法政大学村に、岩波（茂雄）さんのところで働いていた布川角左衛門という方がいて、その方の奥様に英語の宿題を見てもらいに通っていたの。そこでその日、

でもない、負けるってわかっていたんですね。伯母はそれから「明日はお汁粉を作ってあげるから、岩波さんや高野さん（次男の妻の父・高野岩三郎）にも知らせてあげなさい」と。隠し持っていた小豆と、お砂糖はないからサツカリンを入れてお汁粉を作りました。お汁粉なんて久しぶりで、わたしはもう楽しみで楽

しみで。翌日、岩波さんや高野さんもういらしたところに、NHKの記者がばーってやってきたんです。血相を変えてやってきたもんだから、これはお汁粉を狙ってきたんだ！食べられたら大変だ！って、慌てて台所に隠しました（笑）。NHKの人は、岩波さんや高野さんに「天皇さんをどうしましょう？」と聞きに来たんです。それに対して高野さんはたしか「あの方は学者だから、引退して植物の勉強をなさったらいでしよう」と答えてました。ええ？天皇さまが引退する？これはほんとに大変なことなんだって思いましたけど、それよりもわたしが気になっていたのはお汁粉でしたから。もう早く記者の人が帰ってくれないものかしらって（笑）。そのあとようやくお汁粉を食べられて、その夜から伯母は、もう構ったことじやないと家の電氣も明るくつけて、口数も多くなつて。まるで違った世界を見るようでした。その後の玉音放送より、あの日のことをよく憶えています。

戦後しばらくは、開拓村の農家の人たちが作った野菜を持って行商に来ていました。別荘のお付合いより、そうした地元のおじさんたちの話のほうが面白かった。開拓村の石田さんが民宿を始めたんだけど、お客さんがないから誰か回してくれないかと相談されて。その頃、体育合宿が流行り始めていたからそれはどう？と言ったら、せっかくの平たい土地をグラウンドに潰したくないって。じゃあ音楽関係はとなつて、でも楽器つてうるさいでしょう？近所の牛のお乳の出が悪くなったら困る。それなら人間の声しかないわねって。それで知り合いの早稲田のグリーククラブを紹介して。そこから毎年のように、もう38年。学生の頃から知っている子たちがOBになつても毎年のように訪ねに来てくれて。わたし、彼らのこと、「年下の恋人たち」って呼んでるの。

笑え、浅間っ子！

合言葉は「元気がいちばん！」
わんぱくきょうだい、
全員集合！

爽やかな秋空をバックに並んだ6つの笑顔。応募で大工を営む山崎和広さんの6人きょうだいです。

まずは自己紹介。紅一点の長女・涼さんは高校1年生。今、ハマっているのは、学校帰りに友達とカラオケに行くこと！隣でちよつぱり踊るかしようにはいかんではないのが、長男の終くん（13）。「好きなことは卓球にバスケットスポーツ全部です」と言う。ト、「スポーツなら俺たちだもん」と弟たちが一斉に横入り。はいはい、お一人ずつどうぞ！次男・蓮くん（11）「俺はバレーボール」三男・慧くん（9）「僕もバレー」、足も速いよ、そこに四男・嵐くん（7）「僕はバドミントン！あとね、あとね…」ここからはもうエンドレスの特技自慢（笑）。おっと、もうひとり、おとなしいからって忘れてはいけません。涼さんに抱かれてニコニコしているのが、去年生まれただばかりの末っ子・龍くん。「コイツの特技はいっぱい食べることでーす」と、お兄ちゃんたちが代わりに教えてくれました。

育ち盛りのわんぱく盛り。毎日ケンカは絶えないそうですが、とにかくみんな、びつくりするくらい素直。ふざけていても、さりげなく年下の弟を気遣う優しさも。

「特別あもしろこうしろとは言いませんが、田舎の山暮らしだから、自然と協力したり思いやることが身につくんじゃないかな。元気がいちばん！」と山崎さん。

少子化問題もなんのその。君たちの笑顔こそ、私たちの地域の宝です！



初めて訪れる人からしたら「なんじゃそら」な、北軽井沢ならではの常識。関東地方にあっても「亜寒帯湿潤気候」に属す。あまりの寒さに観光客が恐れをなして逃げる一方、移住者の多くが最も好むのが「冬」だったりする。日中の最高気温が氷点下なのは当たり前、生半可な装備ではすぐにシモヤケができる。それなのに、やっぱり冬にハマる人が多い。今号の「あるある」では、その理由に迫る。

11月から1月にかけての「あるある～鮮烈な寒さ～」

これまで冬だと思っていた季節は、実は冬ではなかったのではない…。
そう思わずにはいられない「真の冬」が、北軽にはある。
ほんの一部をここに公開。

「あるある1」

マイナス10度を下回ると、どんな美人もハンサムも、分け隔てなく鼻毛が凍る。鼻毛が凍る寒さになると、冬になったなど実感する。



／ あったまりなー／



「あるある2」

室内は冷蔵庫より気温が低い。

そのため、凍らせたくないものは何でも冷蔵庫にしまう。白菜も玉ねぎも人参もニンニクもリンゴも、台所に放置すれば翌朝にはカチカチに凍っていて使えない。

また、野菜以外に味噌汁なども凍る。前の晩に飲み残した味噌汁は鍋の中で凍りつき、ひっくり返してもこぼれない。火にかけて元に戻す。

「あるある3」

家に帰ったらまずやること。
お湯を沸かす。

凍った蛇口を溶かすにも、冷えて固まったオリーブオイルを溶かすにも、流しに置けばなしにしたグラスを引剥がすにも、お湯が必要だから。予め鍋などに水を入れておかないと、水が出ないので注意。否が応にも備わる段取り力。



「あるある4」

凍って愕然としたもののリスト。

- 歯磨き粉●シャンプー（もちろんコンディショナーも）
- 洗濯物●ビール（缶は変形し瓶は割れる）●水道（蛇口）
- 排水（洗濯機の排水が真っ先にやられる）●玄関の靴
- 味噌汁●風呂場の窓（2月下旬まで開かない）

「あるある5」

寒い家自慢。

寒い家はツライ。どう考えたって断熱のしっかりとした立派な家に住んでの方がいいはずなのに、寒さ自慢で負けたと異様に悔しい。自分の住み家が寒ければ寒いほど（それを耐えれば耐えるほど）、「生きている感」を得られる仕組みとなっている。また、同程度の寒い家に住んでいる者とはすぐに仲良くなれる不思議もある。



「あるある6」

人との距離が近い。

寒さは人を近づける。仕事の休憩時間だとか、飲み会だとか、隣り合う人々が寄り添っている。特別仲がよくななくても寄り添っている。少しでも暖をとるために近くなるのか、服をたくさん着ていて（？）無防備になるのか、理由は分かっていない。



「きたかる建物応援団」がゆく！

絵文 伊郷吉信

〈第三回〉一匡邑はひとつの家族

いっきょうむら

西村伊作が設計した理想郷

旧草軽電鉄北軽井沢駅から西に歩くこと30分、生い茂る緑の中に可愛いらしいペンダのついたバンガローが建っていた。まるでハリポッターの映画にでてくる森に迷い込んだような気分になる。バンガローは気にならない程度の距離をおいて配置されていた。鮮やかな苔の緑に出会って、地面すれすれに顔を出すように小川が流れている。

一匡邑は大正12年に一高出身の仲間たちにより造られた。ちなみに一高（旧制第一高等学校）は帝国大学の予科と位置づけられエリートをたくさん輩出した。村でなく邑としたが邑は大きな村を意味するらしい。さすが一高。

残された開邑当時の写真をみると樹木はまだ細く、十分すぎるほど光届く場所であった。浅間山がよく見えたという。許可いただき、敷地を歩くと創建当時の形を残すバンガローを3棟探す事が出来た。・・・西村伊作だ！



「自由建築研究所」代表、協同組合「伝統技法研究会」副理事、NPO「あさま北軽スタイル」理事、設計活動とともに、建物保存活用のためのアドバイス、調査、研究を行なう。「ふしの家移築プロジェクト」「狩宿茶屋本陣調査」等、北軽井沢、長野原町とも縁が深い。

私が一匡邑に興味を持ったのは西村伊作「明治17年（1884）〜昭和38年（1963）」が当初のプランニングを行い、バンガローを設計したと聞いたからだ。設計者のことはこれまで表にでることはなかった。町誌にも記載がない。知られたのは2013年のルヴァン美術館の展示からだろう。

西村伊作を一言で語るのには難しいが、東京お茶の水にあった文化学院を創設した人物として知られている。自由な精神に基づき生徒の個性を引き出す教育を行った。また、建築家としても有名で、居間中心の家族生活を重視した住宅を数多く設計した。格式を重視した前近代の住宅から脱却を目指し、その形がバンガロー住宅だった。バンガロー住宅は20世紀初頭にアメリカで流行したテラスを持った簡素な住宅である。これを日本に持ち込んだのが西村である。一匡邑は西村の理想の具現化といつていい。

また、土地は共同所有で開邑当時は誰がどこのバンガローを使用してもよかったという。都会から離れ、夏のひとときを、共同生活をして楽しむのだ。当時は中央に会館があり、共同浴場があった。家には水道ガスも引かれてなかった。朝は川で歯ブラシをし、顔を洗った。ここでは皆が家族のようだったという。何組かのカップルも誕生した。

今回の取材の中で初代邑長大村正夫の長男で、幼少から亡くなるまで毎夏をここで過ごした大村春夫の膨大なスケッチが確認できた。一匡邑を愛してやまない人物であった。93年前、理想郷を目指して集った人たちは、今はいないが、その子孫が、美しく昇華した空間を引き継いでいる。空間は人々の思いを映すのだ。

失敗

広瀬 弦

失敗した。関越を降りて18号から146号に入り、北軽井沢へと走る。時々見える浅間山に「コンチワ」。少しかおジャマしますねー。いえいえ、おかまいなくー」とか言いながら気軽に引越してきてしまった。

去年、突然東京の家がなくなった。次に住むところをなんとかするまで、一旦どこかに避難しなくてはならなくなった。ずいぶん前から北軽には縁があったので、少しのあいだ生活することにした。毎日出勤するような仕事でもないし、東京へ行くのも月に二、三回で済みそうだし、どうせ一年もいないだろうかなんとかなると思っていた。報告した人たちには自然がいっぱいいいね、なんて言われ、まんざらでもない気分であってみたいとんでもない。自然がいっぱいなところと東京の往復は6時間かかる。月二、三回でも出発するときにはかなりの覚悟が要る。キラキラ輝く雪が降ってくる自然の冬はバカみたいに寒く、いつ凍死するか遭難するかとびくびくし、可愛らしい野生動物が動き出す春はイノシシが家の壁伝いに地面をフガフガ掘り進んで行く音を布団の中で聞きながらびくびくし、涼しい風が吹き抜ける短い夏は人が数十倍に増え、急に聞こえる子供の叫び声や、いつ現れるかわからない来客にびくびくして過ごした。空が深い青に変わり、木の葉が毎日みるみる赤く染まってゆく今は、これから来る季節にびくびくしている。そういえば一年中びくびくしてたなあ。よし、今年はびくびくしないように準備しよう。楽しみなな。え。楽しみなのか。なんかおかしいぞ。うーん。

昨日の東京からの帰り道、146号をくねくねと登ると浅間山が見えた。思わず「ただいまー。いい天気っすねー。今日は左肩からケムリ出てませんねー。明日もよろしくー」と話しかけてしまった。困ったな。東京に早く帰りたいんだけどな。やっぱり失敗したな。

広瀬 弦 (Gen Hirose)

イラストレーター。1968年東京都生まれ。絵本、挿絵などで、個性ゆたかな仕事が高く評価されている。「かばのなんでもや、うすうすう、ふあああん」(佐野洋子作/リプロボート)でサンケイ児童出版文化賞推薦。『空へつづく神話』(富安陽子作/偕成社)で産経児童出版文化賞受賞。主な作品に『サメのサメサメ』(講談社、『まり』(クレヨンハウス)、『かつてなくま』(偕成社)、『西遊記』シリーズ(理論社)など。今年11月に新刊『いそつぷ詩』(谷川俊太郎作/小学館)を刊行予定。北軽井沢には母・佐野洋子の山荘があり、幼少の頃よりたびたび訪れている。

編集後記

僕のうちには犬がいる。今年のゴールデンウィークに北軽のフリーマーケットで出会った。北軽生まれのオスの雑種。ちょうどその頃コブシの花が咲いていたので、コブシと名付けた。生後二ヶ月、そりゃあ可愛かった。

雑種は頭がいいと聞いていた。実際、以前飼っていた雑種のチャッピーは頭、性格ともに申し分なかった。おまけに顔つきもすばらしかった。ところがコブシときたら……。リードを噛み切り、脱走し、近所の人から「コブシがうちの玄関先で笑って座ってる。」とメールを貰ったり、散歩中に急に反転して走り出して転ばされたり、ドッグランで放した方がいいが捕まえるのに小一時間がかかったり……。あ、そうそうこんなこともあった。

散歩して帰って30分もたっただろうか、寝ているコブシに声をかけた。コブシはいつものように首をもたげた。いつもと違っていたのは、その目が閉じたままなのだ。冗談も休み休みやってくれと思いがけながら近づいて見るとなんと両目がコテンパンに殴られたボクサーみたいに腫れているではないか。そうこうしてるうちに、今度は唇がみるみる腫れてきた。慌てて病院に連れて行って事なきを得たが、どうやら地中の何かを食べてアレルギーを起こしたらしい。先生には笑われるし、病院に診察に来ていた人には「何犬ですか?」と聞かれるし。

そんなコブシだが、そのつづらな目はあくまでも透き通り、そのピンと立った大きな耳はどんな小さな音も聞き逃さない。脱走して未知の森の中を走り回るのも、たぐいまれな好奇心のしわざだし、アレルギー事件も鋭い嗅覚の成せるわざなのだ(ちよっと失敗したけど)。そして何より、その立ち振る舞いは僕の心を癒してくれる。

雑種の、いや北軽犬コブシ。僕は君を見習おうと思う。そしてもっともつと良い誌面をつくっていききたい。(S)

きたかる vol.6

2016年10月発行

企画・編集・制作/きたかる編集部

【編集長】藤野麻子【編集】AKIKO・福岡悠貴【写真】田淵章三・田淵三菜(森の写真館)【デザイン】田淵章三【WEB制作】G+G

発行/北軽井沢じねんびと

印刷/上毛新聞 TRサービス

※この冊子は長野原町の助成を受けて発行しています。

お問合せ:きたかる編集部

メールアドレス:info@kitakaru.me

住所:〒377-1412 群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 1924-1360

「きたかる」へのご意見・ご感想をお寄せください。

「きたかる」ホームページ <http://kitakaru.me>

北軽井沢の季節の風景、イベント、取材こぼれ話など、WEB版も更新しています。

※本誌掲載の写真・文章を無断で複写・複製・転載することを禁じます。